

三十五歳

後編

湯原 昌泰

自分が呼ぶのか、それとも相手がやってくるのか、茨城に戻ってしばらくは、たとえば一や二、三や七といった数字となつて百合子は徹の前に姿を現した。一月二日が誕生日だった。三月七日に入籍していた。赤羽のマンションを引き払つて電車に乗り、常磐線をさかのぼって土浦駅に辿りついた。改札を出て西口に向かい、阿見中央公民館行きバスを待つ。やがてやってきたバスを見てふと涙が出た。その車番が一二三七だった。

四月の二十四日に徹は三十五歳にな

った。四に四を足した三十五歳。男の盛りの年だった。四日行つては一日休み、四日行つては一日休み、その度に徹の体は大きくなり、そのことが徹には嬉しいのだった。給料をもらつては毎回二千元を抜き、残った金には手をつけずそのまま母に渡していた。母はその金を父の遺影の横に置き、それで滞っていた公共料金を支払つた以外、一切手を付けていないのだった。金が増えれば徹も増え、それにつれて徹の酒の量も次第に少なくなつていった。血の気のよくなつた徹を見て、頑張っ

ていこうねと母はまるでこれから先はいいことしかないように徹に言うのだった。

世間はゴールデンウィークに入っていた。だが休日こそがかき入れ時である徹たちにゴールデンウィークなどは関係ない。強いて言えば高速を使う時、途方もない渋滞に巻き込まれないよう道路状況には常に気を配つていなければならず、普段と違うのはそのことぐらいだった。その日朝七時に事務所に集合することになっていた徹は六時半には事務所に着き、山崎と川上が来るのを待っていた。櫛の木を背に煙草を吸っているとふと家を出る前に吸つた煙草の火を消したかが気になった。もう三十五歳なのだった。自分が一体何をしているか、そろそろわからなければならぬ。

その日の作業はつくば市から上野への引越しだった。母の夏子は自分がまだ幼かった頃、上野駅にほど近い借家に祖父母と三人で住んでいた。その頃の思い出がひとりで蘇るのか、母は上野と聞くと涙がこぼれると言っていた。幼い頃から家を助ける為に看板の文字書きや妹たちの子守りをしてい

た母が唯一自分で選び、自分の楽しみの為にやっていったことが野球部のマネージャーだった。母は子供の頃から巨人軍の大ファンで、特に長嶋茂雄が好きだった。「あんたは覚えちゃいないだろうけどさ」母はそう前置きし、徹が生まれ家族三人となって初めての海外旅行、その空港で偶然長嶋さんを見つけ、この子を抱いてやってくださいと頼み徹を抱いてもらったことがあると言う。「嫌な顔一つしないで笑ってあなたを抱いてくれたよ」母はそう続けた。母は取手市の商業高校に通っていたが、その高校を選んだのは高校を出た後少しでも就職に有利になるようにと思っただから、そして誰も自分の家が貧乏だと知らない学校に行きたかったからだ。

母の夏子が高校三年生の時、部は茨城県の代表として春の選抜大会に出場することになった。鹿兒島に定岡がい、作新に江川がいた時代だった。母の高校には飛び抜けたエースがいたわけではなかったが、チームワークで勝ちを重ね、県の大大会では常に上位に食い込んでいた。高校としても初の甲子園だ

った。王、長嶋とともにV9を生きた母がそれをどれだけ喜んだか。そんなことは考えるまでもないことだった。だが甲子園行きが決まり、今であれば旅費はすべて学校や後援会から出るのかもしれないが、当時の母の高校ではマネージャーは野球部員として認められておらず、よって母は大阪までの電車賃、向こうに着いてからの宿泊費などの一切を自分で用意しなければならなかった。しかし庇が傾き、畳の腐った長屋に家族七人で重なるように寝る母にそんな金はない。であるから夏子は一生に一度の甲子園だったが家に残りテレビを見て観戦しようと思っていた。そんな夏子に祖父の昌美は「わかった、俺が何とかしてやる」と言い、その日から連日夜になると家を出てどこかへと向うのだった。昌美がその時外で何をしていたか。夏子がそれを知ったのは随分後になってからのことだったが、昌美は知り合いの家を方々まわり、金を貸してくれないかと頭を下げていたのだった。だがすぐに集まると踏んだ旅費は一向に集まらず、仕方なく昌美は夏子を連れて年の十離れた兄が住む十条の家を尋ねることに決めた。

た。その時祖父は母に「兄貴が頑張ったお祝いに旅費くれるってよ」とだけ言っていた。十条の叔父の家に着き、昌美と二人客間に通される。昌美は「久しぶりだなあ」と少しはしゃいで叔父の家に上がった。庭には小さいが池があり、艶やかに光る松があった。腐った長屋に住む母はそれらを見て、この家にあがる縁が私にはあるのだと思いつつ、どこかでそれを誇らしく思った。

母方の祖父の実家は新潟で米を作る農家だった。長男が家を継ぎ、次男は当時の国鉄、三男は電電公社の社員となり、残った四男の昌美はまともな定職にもつかずその日暮らしを送っていた。金がなくなる度に実家に無心をし、その度にこれが最後だと言われ金ももらっていたのだった。やがて昌美の父が死に兄が後を継いだ。昌美はその兄に、金輪際お前と新潟は関係ないと家族の縁を切られていた。残った遺産は一切昌美には渡されず、逆上した昌美はそんなものいるかと兄たちに向かい啖呵を切った。夏子が叔父に会ったのは昌美の母が亡くなった時に新潟に行った一度きりで、実に十二年ぶりだっ

た。しばらくして客間に入ってきた叔父は夏子を見ると大きくなったと目を細め、元氣だったかと優しい声をかけた。

入ってきた叔父に挨拶をすまずと昌美はにわかに居住まいを正し、今回娘の通う高校が県に選ばれて甲子園に出られることになった。すまないが娘が甲子園に行く為の金を貸してくれないかと言ひ、手をついて畳に頭をこすりつけた。夏子は急に頭をついた父を見て話が違うと思った。話が違う。まったく違う。夏子は叔父の方から進んで金を渡してくれるものだとばかり思っていた。少なくとも家を出る時の昌美の言い分はそうだった。なのに頼む、頼むと繰り返して言う父を見て、お父ちゃんにこんなことをさせるぐらいなら甲子園になんか行けなくていいと思つた。だがふと叔父の方に目をやるとその叔父と目があひ、その目がお前は頭を下げないのかと言っているように見えた。母はそれを見て、お願いしませよと言つて昌美と同様畳に頭をこすりつけた。畳が涙で濡れた。お父ちゃんにひどいことをしたと思つた。叔父は二人に頭をあげると言ひ、「他ならぬ夏

子ちゃんのお祝いだからな」と言つて昌美に金を渡し、返さなくていいと付け加えた。昌美は叔父にありがとう、ありがとうと何度も頭を下げた。叔父の家を出て駅までの夕闇。久々に金が入り気をよくした昌美は「どうだ、たまには寿司でも食つてくか」と何の為の金かを忘れたように夏子に声をかけた。夏子はそれを訊くとこの人は私が何とかしなくてはと思ひ、昌美には見せないように涙を拭き、うんと笑つて頷いた。

それからもう五十年近くの時が経つていた。後に建築現場で足を踏みはずして死んだ昌美に徹は一度も会つた覚えがなかつた。祖母のこともほとんど記憶になかつた。唯一覚えてるのは祖母の葬儀の日、祖母の入つた棺桶に花を入れて蓋を閉め、その蓋に石で釘を打つただけだった。確か雨が降つていた。雨と緑香のおいが混じつていた。「これじゃおばあちゃんが出られなくなる」と母に言つた。その徹は母を抱き、わかつてるよと言つて震えたのだつた。

山崎と川上と向かつた現場は同じ県

南地区にある神立センターから依頼された現場だった。引越し組合に加盟していた久慈運送はこの手の他センターからの依頼作業をすることもままあるのだつた。積地は荒川沖を超えた先の並木にあつた。錆びた階段を昇りドアを叩く。出てきたのは足を引きずつた老婆だった。

老婆はよくきてくれましたと徹たちを中に招き入れた。カーテンが閉め切られた薄暗い部屋は物で床が見えないほど荒れており、引越しの準備など何一つされていないのだつた。「ちよつとこれは」と絶句する山崎に客は、「足がね、痛くてね、準備できなかつたのよ」と弁解するように強く言ひ、「払うから。その分のお金もちゃんと払いますから」と懇願するような声で続けた。それが人と話す時の癖なのか、客は右手で自分の太腿をぎゅつとつねつて話すのだつた。「一回外行こうぜ」年嵩の川上は山崎を促し、徹たちは一度外に出た。「神立センターよ、なめてっしょ」階段を降りたところで川上が言ひ、「いやまじありえねえつすわ」と山崎が相槌を打つた。事務所に電話を入れ、「一つも準備されてないんすけどどうしま

す？」と川上が社長に判断を仰いだ。電話を受けた社長はきちんと神立には文句言つとくから今日はその現場を終わらせてきてくれと川上に伝えた。「了解です」言つて川上が電話を切る。資材を降ろして再び客の元を訪れた。まずは箱詰めからだつた。

山崎に指示を受け、徹は玄関付近の荷物を詰めはじめた。部屋は入つてすぐに玄関兼キッチン、その奥に六畳の部屋、さらにその奥にもう一部屋六畳間があるのだつた。徹はまず靴を片付けようと思ひ客にはいていく靴はどれかと訊き、残つた靴をダンボールに詰め込んだ。箱にできた隙間に玄関に敷かれていたマットを挟み、下駄箱のそばにあった殺虫剤やガスコンロ用のボンベなどを詰める。壁にはヤニで変色した五年前のカレンダーがかけられていて、その横に原辰徳のポスターが劣化したセロハンテープで留められていた。マットは油でくつついたのか台所の床にこべりついていて、剥がそうとするとペリペリと音を立てるのだつた。そうして五つも箱を作り、使つていたガムテープがなくなつたので一度荷台

まで戻つて新しいテープを取つてこようと徹は玄関に立つた。その時に何気なく見たダンボールの側面に、無数のゴキブリが這つていた。

視線を下に落とすとそこには必ず三匹はゴキブリがいるのだつた。空気がそれを伝えたのか徹が気づくとほぼ同時に山崎と川上もそれに気づき、山崎は「まじかよくっそ、ふざけんなよ」と客の前で声を荒げた。「あらゴキブリだめだつた？」客は驚いたというように訊き、それに山崎が「普通の人間はゴキブリだめなんだよ」と腹立ちを隠さずに怒鳴つた。しかしダメだろうが何だろうが徹たちはこの現場を終わらせなければならぬ。虫が蠢き跳ぶ中を徹は引き続き台所の梱包に取りかかつた。何が詰まっているのか流しには水が溜まつており、それが緑色に変色し重い臭いを発していた。息を止めぬめる水の中に手を突つ込み詰まつた物を引つ張り出す。何か黒く固まつたそれを排水溝から外すと水は勢いよく流れ出た。

「お客さんね、まずゴミとゴミじゃない物、教えてもらえますか？」山崎が苛

立つた声で訊くと客はそれに憤慨したように「ゴミなんてものは何もない。みんな大切な思い出じゃないか」と目を潤ませて声をあげた。「いや、よくわかんねえけどね」山崎はそれにタメ口で答え、「じゃあ全部荷物でいいんですね？」と再度確認した。客はそれに勿論だと頷き、徹たちはそれから箱に物を詰めていった。もう物ではなくゴミの扱いだつた。まるでブルドーザーがそうするようにテーブルの上にあつた物を割れ物もそうでない物も一緒に嫌たに箱に落としていく。このように嫌

悪を隠さない山崎と川上だつたから、客は自然と徹の方に近寄つてき、自分の身の上話を始めた。二十で最初の子を産み二十四の時に旦那は私たちを残して出ていった。それからは女手一つで立派に子供を育ててやるんだと心に決めてどんなことでもやってきた。息子たち二人は今それぞれ大阪と鳥取に住んでいて、たまにしか会えないがその時は孫たちを連れてやつてきてくれる。ここから引越して上野の新しいマンションの一階には老人介護施設がある。私はこんな足だから一人で満足に買い物にも行かれないが、でも上野

に住めば大丈夫。息子が探してくれただ。同い歳ぐらいの人も多くいるだろう。だから何にも悲しいことなんてない。物を詰めながら、食器棚を外しながら、洗濯機を運び出しながら、客は延々とそのようなことを徹に言いつて聞かせた。客の右手はその間もずっと自分の腿をつねって離さなかった。その姿を見て徹は巨人が好きなの客を自分の母にすり替えるのはあまりにも容易いと思った。ゴミに埋もれ、ゴキブリと暮らして、原辰徳のポスターが貼つてある。やつてきた若い作業員たちどれが荷物でどれがゴミだと訊かれ、昂つた母はゴミなんてものは何もないと言う。これは竹雄さんの着ていた作業着だ。これは徹が使っていたライタ―だ。お前らみたいなガキになぜゴミ呼ばわりされなくちゃならない。文句一つ言わずにいた徹に客は水を得た魚のように話をする。お兄さんならわかつてくれるよねえ。えらび、きらい、するるのは人の心。えらばず、きらわす、みすてないのが仏の心。今の人はなんでみんなこんなに冷たいんだろかねえ。まるで冷たいことが尊いことだとも思つてみたいだねえ。それら

を訊いて徹の心は限界だった。だから徹はふと客に、「それでこれはゴミですか？」と原辰徳のポスターを指さして訊いた。すると客は信じられないといった顔をして、「だからこの世にはゴミなんてないって今言つたばかりだろ！」と涙を零しながら隣の部屋に去つていった。徹はその背にわかりましたと答へ、止めていた作業を再開した。

荷物が積み上がったのは十二時をすぎた頃だった。「じゃ降ろし地で待つてます」と山崎は疲れた声で客に言い、「これじゃ今日の飲み会には間に合わないっすね」とトラックに戻つて川上と言つた。ゴールデンウィークの最終日となる今日を終えると、長かつた繁忙も終わり仕事は一段落する。であるから毎年決まつて連休の最終日には仕事終わりに会社近くの焼肉屋で慰労会をひらくのが久慈運送の常だった。ただで飯が食え、ただで酒が飲めるとあつて、また今まで休みなく働き明日はやつと従業員揃つての休みだということもあつて、山崎や川上たちはこの日は浴びるほど飲んでやると前々から息まいていたのだった。その徹たちが

上野に着いた時には時計は十五時を少しまわつていた。それからさらに客を待ち、客が足を引きずつて降ろし地に現れたのは十六時をすぎた頃だった。

山崎たちは雑に家具を設置し、まるで投げ入れるかのように荷物を部屋に入れると会社へと引き返した。遅い車をおおつて飛ばし、事務所に着いた頃にはもう十九時に迫つていた。一度家に戻つて服を着替えてから店に向かうと話す二人に「今日は体調が悪いので」と徹は飲み会に出ることを辞退した。家に帰る前に缶ビールを二本空け、家に着いて母の作った飯を食う。その後も徹は酒を飲み続け、「もうそろそろやめときなさい」と徹を気遣う母に「明日はやつと会社揃つての休みなんだぞ」と声を荒げ、母が止めるのも聞かず強い酒、より強い酒へと手を伸ばしていった。気づくともう母は床に就いていた。徹はふと父の顔が見たいと思ひ壇のある居間に入った。台所の電気が差し込んでいるだけの居間は暗かつた。その薄い灯りを頼りに照れくさそうに笑う父を見る。なあ父ちゃんよ、あんたはなんで俺より先に死んだんだ。徹はそれからしばらく父の遺影を見続

け、ふとその脇に置いてあった金の入った封筒に手を伸ばした。封筒を手を外へ出ようとすると徹に気づいた母は、徹の背に何を重ねたか「徹、どこ行くの？」と不安そうに声をかけた。徹はそれに何も答えず靴をはき、玄関に立つと戸を開けそして閉めた。

空に三日月がかかっていた。冬の闇に比べると春の闇には色がある。それは春が冬よりも甘いということに他ならなかった。家の脇を流れるドブ川に目をやる。野良の鶏が家に住み着いた時、鳥たちはこの一メートルあまりのドブ川を飛び、渡った先にある雑木にとまって眠りについていた。東北に震災があった頃、茨城のビジネスホテルの一つが福島県民の宿泊を拒否した。その頃このドブには誰かが食い残したラーメンの麺が流れていた。震源地からほど遠い茨城の、さらにその県南に位置する阿見であっても軒並み瓦が崩れていた。徹の父方の祖父である清の家も例外ではなく、銀行員だった清に融資を受け、店を持ち直した瓦屋の主人が震災後に清の家を訪れ、助けてもらった清さんの瓦を崩してしまっ

て情けないと玄関先で涙を流した。実家で飼っていた白い猫が死んだのは徹が三十二歳の時だった。死の間際、目のほとんど見えなくなっていたその猫は、母が家に戻ると目が見えないことが怖いのか母にすり寄って離れなかった。真っ白な猫ではなく、雪の降らない阿見町の、アスファルトにかかった雪のような白だった。その猫を隣の空き地に埋めた次の日、死んだ猫を生き写しにしたかのような猫が墓のあたりに立っていた。黄昏時にさしかかり、玄関の戸を開けた徹に気づくとその猫は声もあげずにその場から去っていった。わかるのだとも思ったし、悪いことをしたとも思った。それから三年が経っていた。町役場まで辿りつくとき空車のタクシーを見かけたのでそれを停めて乗り込んだ。タクシーのナンバーは七三。裏に返せば三七だった。徹は一瞬目を閉じると土浦駅と短く言った。車は静かにドアを閉め、目的地へと走り出した。

もしも街に腎臓があるととして、この街の腎臓は狂っている。阿見坂を下れば蓮があり、蓮をさかのぼれば桜町が

ある。桜川の土手に咲く桜が他と比べて白いのは、この桜川に流れる水に水以外のものが混じっているからだ。それはきつと酒だった。いやそれはきつと涙だった。いずれも桜川を流れていき、濾過し切れなかったそれらはやがて霞ヶ浦で蓮になる。つまり蓮は夢だった。あるいは蓮は嘘だった。誰かが誰かを殺そうとする度に一つ蓮は花開く。誰かが言葉呑みこらえる度に蓮は一つ花開く。その蓮を横目に土浦駅に辿りつく。西口ロータリーには車高を低くした車が幾台も停めてあり、若い男たちがエンジン音を唸らせたむろしていた。その脇で女たちが地べたに座って煙草をふかしている。駅ビルが閉鎖され商店が相次いでシャッターを下ろした今、この町の駅前には市役所かパチンコ屋しかない。黄色く点滅する信号を渡るとふと客引きが近づいてくる。徹は男に誘われるまま案内された店の中に入っていく。

三人も乗ればいっぱいになるエレベーターで店のある三階まで昇っていく。重力に逆らい足を引っ張られるようにノロノロと上がるこのエレベーターは、ここで働く者たちの心臓を必ずや我に

かえすだろう。ならばドアが開き踏み出す一步は不確かな一步ではありえない。中に入るとママなのだろう四十すぎの茶髪の女が徹に頭を下げてきた。

「ご指名の子はいますか？」と訊かれた徹は最初に目についた写真の女を指さし席に通された。やがてやってきた別の女が作った酒を飲む。「普段は何なさってるんですか？」と訊く女にテレビの編集だと答えると、「えっ、すごい」と女は馬鹿みたいな声を出した。その声を聞き、嘘をつく必要と徹は考え、そんなものがまだ俺にあるのかと不思議に思った。飲み物を頼んでもいかと訊かない女のグラスはいままで経つても空のまま、徹の酒だけが飲み干され、また足されていった。そうして二十分もすぎただろうか、女は席を立ち、それでも「ありがとうございしました」と徹に深く頭を下げ、入れ替わりに次の女が席についた。その女がどうやら徹の指名した女だった。女は横に座るなり「いま座ってた亜紀さんさ、何か変じゃなかった？」と徹に耳打ちした。何のことだと徹が訊き返すと、「あの人、子供、三人いるの」と声を落として徹に言う。「何か話すタイミ

ング変だしさ、笑うところじゃないとこで笑ったりするから皆にも気味悪がられてるんだよね」女は続け、それから「あつちに座ってる美久さんは昼やりながら夜もやって、今日は応援で他の店からきてるんだよ」とか、「そっちの雪ちゃんに住む家は絶対東京がいいってわざわざ池袋から通ってきてるの」などと言う。「あの白い子は由美ちゃん」と言った先に徹は目をやった。由美と言えば中学校時代の同級生の名前だった。入試を目前に控えた十二月、由美は徹の家に電話をかけてき、前から徹のことが気になっていたのでよかつたら付き合つて欲しいと言つた。その電話の向こう口で徹もよく知るクラスメートたちの笑い声が聞こえた。その笑い声を聞いた徹は由美が何かの罰ゲームをやらされているのだと思ひ、「罰ゲームか？」と由美に訊き、そんなことまでしなくて大丈夫だと言つて電話を切つた。なぜ今日なのかもわからなかつた。だが後で知つてみればその日は由美の誕生日だったし、次の日はクリスマスイブだった。その後由美は卒業式の日に徹を呼び出し、「いつか整形して美人になつて徹のこと見返し

てやるから」と言つて笑つた。その由美がいま目の前にいる。自分よりもはるかに年若い由美を見て、徹はなめんなよと声に出した。帰ると言つて金を払い席を立つた。すれ違つた由美の左の首筋に、由美と同じほくろがあつた。

店を出た徹はふらふらと何かに導かれるように土浦駅の駅前に向かつた。桜町。北関東一の風俗街。だがこんなにも廢れた風俗街があつていいのだろうか。塗炭でできた店に常磐線をもじつたイメクラがある。長椅子で二人の客引きがドンブリにサイコロを入れて半、丁と金をかけあつている。駐車場の車止めに座り携帯を片手に考え込んでいた若者がふと意を決したように立ち上がる。鈍い光が点滅する。女に入れ込めば歳一つと昔から言うように、店の女に惚れ金を使い切つて死ぬことは馬鹿なことではない。好きな女に狂つて死ぬことのもどこにも馬鹿はいないのだ。それを実際にやつたのが祖父の昌美だった。昌美は娘ほども年の離れたスナックの女の手をとり、実の娘である母を殴つて女と家を出て行つた。そして昌美と女のどちらにも縁のなか

た龍ヶ崎に連れ子と三人で住み着いた。その昌美を徹は偉いと思う。それまでろくにしてこなかった仕事をしてくたばって。だって稼ごうとしたんだらう？ 女はやはり女だったと思い、守ってやりたいと願ったんだらう？ なら出てった女も偉かった。その人は人を変えられる人だった。ポケットをまさぐって唾えた煙草に火をつける。ふとに角から見覚えのある集団が顔を現したのはその時だった。「あれ？ おい湯川なにしてんだよ」曲がってきた六人の中の一人が言った。その声を聞き徹は知っていたと思った。大柄な男は若いドライバーの山崎だった。

「調子は治っちゃったんですかねえ」と山崎は言い、川上と栗山はニタニタと笑って徹を見た。「はいっ。湯川さん。僕お酒が飲みたいです」そう言っって手を上げたのはまだ十八歳になったばかりの新井だった。「行きましようよ湯川さんの奢りで、ねえ」山崎が酒臭い息を吐いて肩を組んで徹を引っ張った。連れて行かれた先はいま出てきたばかりのキャバクラだった。「あれ？ また戻ってきたんだ」徹を見た女は言い、

「みんなテレビの人？」と席についた山崎に訊いた。山崎はそれを訊くと爆笑し、「そうそうテレビの人、テレビの人」と女に言うのだった。「すーい、どんな番組作ってるの？」女は楽しそうに訊き、十八歳の新井は「湯川さん、いくらなんでも幻滅っすわ」と徹に軽蔑の目を向けた。「お酒頼んでもいい？」と訊く女に「湯川さんの奢りだからお前ら湯川に礼言えよな」と山崎が言い、「んでどうっすか湯川さん、二ヶ月くらい仕事してきましたけど慣れませんでした？」と訊いた。それに徹が「はあまあなんとか」と答えると、「冗談じゃねえよ、冷蔵庫もまともに持ってねえくせによ。そのお前がどのツラ下げて慣れてきたんだよ」と言う。「すいませんその通りです」言っって徹は頭を下げた。ふと父の背を思い出した。死ぬまで腕相撲で勝てなかった。死んでも背を追い抜かせなかった。その父を徹は誇りに思っていた。「お先真っ暗っすねえ」と煙草をふかしながら山崎が言う。それを見た徹はふと立ち上がり、その徹についていた女が何を察したのか「大丈夫？」と不安そうに声をかけた。頭がやけに冴えていた。徹は女に大丈夫

だと言いい、心配するなと言った。

テーブルにあった安酒の瓶を手に取ると徹は栓を開け残った酒を一気に飲み干した。空になった瓶を見た山崎がかっこいいと言っって笑う。兄弟のいな徹にとつて酒、盃はいつも羨ましかった。これが神さままだといつか飲ませてもらったテキーラを思い出す。神さまは飲めば一口でわかるほど他人であり、かっと胃で燃え悪い酔いを残さないテキーラは思えばあの人のような酒だった。瓶を手によろよると山崎に近づくと。徹はそのまま天井を見上げると一つ大きく息を吐き、笑っている山崎の頭めがけて思いっきりそれを振り下ろした。とっさにそれに気づいた山崎は首を振って瓶をよけ、安酒はソファの縁にぶち当たった。「なにすんだてめえ」と山崎が徹の腹を蹴る。蹴られて徹は一発誰かの顔を殴った気がしたがそれを確認する間もなく山崎に殴られ川上に殴られ気を失った。気づくと徹は路上に一人で倒れていて服も体もボロボロだった。全身を襲う痛みを堪え着ていたジャケットの右ポケットに手をやった。何度そこを探しても金の入

つた封筒は見つからなかった。

血とゲロに塗れながら徹は冷えた地面を転がった。目の上が腫れうまく物が定まらない。転がったコンクリートは硬く、とてもじゃないが人が横たわるべきところではなかった。ふいにどこからかカツンカツンとヒールの歩く音がする。その音を遠くに徹は倒れたまま空を見上げた。痛む体を起こしにかり立ち上がろうとする。だが立ち上がるその前に吐き気を催し、徹は地面に胃液とも酒ともつかないものをとめどなく吐くのだった。その徹を見た通行人が足早に徹の前から去っていく。徹は無理に立ち上がろうとするのをやめ、大の字になつて地面に転がった。空を見上げて月を見る。その月がゲロに塗れていた。それを見てああそうかと徹は気がついた。誰も彼もを巻き込んだ。誰も彼もが去っていった。救われねえのは救いようがねえからだよなあ。身をよじつてもう一度立ち上がろうと試みる。三十五歳になつて今、徹は反吐を吐いていた。

(了)

湯原昌泰：一九八四年生まれ三十一才。
茨城県出身、東京都在住。山口百恵と剛力彩芽を足して信じられないくらい冴えなくした顔。季刊誌東京荒野発行者。